

なるほど!



マスメディアの報道

センセーショナルなニュースに
振り回されないで

警鐘報道があふれる裏側には…

「放射能がくる」「安全な食べものなんてもうないから」「しのび寄る脳内被ばく」

……。これらは、福島原子力発電所事故後に発行された週刊誌のタイトルの一部です。

週刊誌に限らず新聞やテレビなどの報道の多くは、「危ない」とセンセーショナルに警鐘を鳴らすもの。そして、「危ないが、こう対処すれば大丈夫」というような、処方箋を示していました。こうした報道に接した人々が不安に陥ったのは当然です。

ただし、私から見れば、これらの報道の多くが科学的な妥当性を欠き、不必要に恐怖をおもわせるものでした。

なぜ、メディアは警鐘報道に走るのか？

それは、メディアが人々の関心を引くのを商売にしているからです。「危ない」と見出しがあれば、「わざわざお金を払ってでもこの週刊誌を買って対策を練らねば」と思います。しかし、見出しに「大丈夫そうだ」とあったら、多くの人は「ああ、もう気にしなくていいんだな」と思い、週刊誌を買おうとはしないでしょう。

テレビ番組も似ています。「危ない」と視聴者に思わせ「〇〇を食べればいい」となると情報を単純化して伝えると、視聴率は上がります。情報が人々に好まれるかどうか

かが大事で、科学的に正しいかどうかは二の次になる場合があるのです。

環境ホルモンの大騒ぎはどこへ

このような傾向が顕著に表れた事例は、以前にもありました。「環境ホルモン」騒動です。1990年代後半、化学物質が人のホルモンに似た作用をして、生殖をかく乱したりキレる子どもを産み出したりする、とテレビや新聞、週刊誌などが盛んに伝えました。その時も、科学者の中には反対意見が多数あったのですが、マスメディアは取り上げず大騒ぎ。しかし、国が数百億円を投じて研究しても、人に環境ホルモン作用を持つ物質は確認されませんでした。

今、環境ホルモン問題を取り上げるマスメディアはありません。今も、胎児などへの影響をこつこつ調べている研究者もいるのですが、そうした研究も顧みられません。科学者の中には原発事故後の現状を「情報災害」と指摘する人もいます。地震、津波、原発事故に加えて、間違った情報が氾濫する災害も起きている、というわけです。

情報を出す「ビジネス」である報道には必ず、バイアス(ゆがみ)があります。そのことを意識して、情報は吟味して受け止めてほしいと思います。

●「なるほど食卓の安全学」の過去記事が読めます。http://www.coopnet.jp/products/anzengaku/



まつなが わき 松永 和紀

京都大学大学院農学研究科修士課程修了(農芸化学専攻)。新聞社勤務を経てフリーの科学ライターに。著書に「メディア・バイアス あやしい健康情報とニセ科学」など。科学的根拠のある食情報を発信する消費者団体「フーコム」を4月に設立。FOOCOM.NET(フーコムネット) http://www.foocom.net/

見抜くヒント
マスメディアの放射能情報を

- 1 一つの記事、ニュースを頭から信じ込むのはやめて、ほかのメディアがどのような取り上げ方をしているかを調べる
- 2 全国紙だから、一流週刊誌だから正しいとは限らず、間違った報道もかなり行われていることを意識する
- 3 これは安全、あれは危険、と単純に区分けする情報は、警戒する
- 4 放射能汚染の影響の程度は、放射線量や汚染の程度など「量」によって大きく異なるので、検査値、測定値の大きさに注目する
- 5 マスメディアの報道、市民団体などの主張や検査結果、国や自治体、研究機関などの提供情報、検査結果など多様な情報を比べて、考える
- 6 チェルノブイリ原発事故後の放射能汚染は日本の現状と大きく異なるので、「チェルノブイリで起きたから日本でも」と論じる情報は警戒する
- 7 個人の体験談は、すべての人に当てはまるものではなくウソの可能性もあるので、警戒する